

# 「浄土にてかならずかならず まぢまるらせ候ふべし」

（『親鸞聖人御消息』、七八五頁）



二つの死があります。一つは、この世からその人の姿が消えてなくなる。

そうすると「あの人は死んだ」という一般的な死です。もう一つは、残された人の心の中に生き続けている故人の面影が、その人の心から消えてしまうことです。これもまた「死」といえると思います。

生れてきたら必ず死んでゆかねばならないし、会えば別れが必ずある。これは人間の力の限界を超えた理です。人間の努力でどうにかなるものではありません。力の及ばぬことです。しかし、自分の心の中に、故人の面影がいついつまでも生き続けてくれていると気づく世界はあります。「この世には

姿はないが、死んだのではない。私が生きている限り私の心の中に生き続けている」という世界です。ここが、別離を受け止める上で非常に大事なところであると私は感じています。別離の悲しみを、悲しみのままで終らさないで、そのことが縁となつて、「ありがとう」の涙に変わる世界のあることを阿

弥陀さまは教えてくださいます。肉親や親しい人との死別は、辛く悲しいものです。この感情を抑えることはなかなか出来ないものです。それは、「もう会えなくなつてしまった」という思いからきます。死んでしまうと、どんなに会いたくても、もうこの世では顔を会わすことも、話すこともでき

ません。しかし、「死別」は、その人との「いのちのつながり」が切れたことでは決してない。顔を会わすことはできなくても、先立たれた人の「心」には会えるはずです。会うことによつて、「ありがとう」の世界は開かれます。

昨年、新聞の投書欄にこんな記事が載っていました。

……中でも、私が心を動かされたのは高校一年生の女子生徒の作品だ。《私に色々なことを教えてくれたおばあちゃん。最後は命の儚さを。本当にありがと

う。四十文字足らずの中に、おばあちゃんへの感謝の気持ち、二人の強い絆が伝わってきた。彼女は、おばあちゃんから教わることを素直に得心できたのだろう。そして、最後の教えが命の儚さ。命あるものは滅びる。だからこそ命を大切に生きる。作者の彼女に、そのことを改めて教わったような気がし、すがすがしい気持ちになった。

四十九歳の会社員の投書です。おばあちゃんの心は、孫娘に伝わり、さらに孫娘の書いた文を読んだ人にも伝わって、その人の心に生きています。「生前に 遇うこと無くて 愚かに



も 死して遇うなり 真の親に」と詠んだ大阪のS師。「同居生活をしていましたので、何時も会っていたように思っていました。別れてみて初めて、うわべだけの会話であつたり、出会いであつたりで、本当に心を通わせての出会い、会話でなかったことなど、自分の愚かさを今知らされました。そして今遅まきながら、母の思いやりのところに、出会わせていただいている思いです」と、心の出会いの世界を語っておられます。

また、亡くなられたお母さんは、お念仏の生涯を生きられたお方でした。S師のお嫁さんに「近々その時がくるけれど、私が死んでも、泣かないで欲しい。死に別れることは、辛い事かも

しれないが、お浄土に生れて往くことは悲しい事ではなく、めでたいのだから、涙が出てもその涙を、歡喜の涙にしてほしい」と話しておられたそうです。

故人の姿はこの世から消えても、会える世界は開かれている。心の中で出会えるし、なによりもお浄土で会える「俱会一処の世界」があります。親鸞聖人は、

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきたちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候ふべしと仰せられます。死別を、悲しみだけで終らせない南無阿彌陀仏の仏法が、今ここに届いております。